

# 唐代金陵関係文学史年表

Chronological table of the history of literature about Jinling in Tang dynasty

寺尾 剛

TERAO Takeshi

キーワード：中国古典詩 唐代文学史 金陵 年表

## 【凡例】

- 一、唐（及び隋、五代十国時代）の文学（とりわけ詩歌）に関わる事項を中心とした金陵関係の年表である。
- 一、ここでいう「金陵」とは現在の江蘇省南京市、あるいは唐代の江寧県・上元県に属する地域のことである。唐代の文学作品では、近隣の都市、たとえば鎮江〔京口・潤州州治所在地〕を「金陵」と代称したりするケースも多いが、ここではそれらを除外している。
- 一、政治的事件や金陵の行政上の変遷等については『旧唐書』『新唐書』『旧五代史』『新五代史』『元和郡県志』『資治通鑑』『太平寰宇記』『景定建康志』『至正金陵新志』『金陵通紀』、あるいは郁賢皓著『唐刺史考全編』（安徽大学出版社、二〇〇〇年）、郭声波著『中国行政区划通史・唐代卷』（復旦大学出版社、二〇一二年）等を参照したが、煩雑になるので逐一参考文献として挙げなかった。
- 一、詩人・文学者の事跡については傅璇琮・陶敏編『新編唐五代文学编年史』（遼海出版社、二〇一二年、以下『編年史』と略す）をベースに、適宜、他の参考文献も挙げておいた。
- 一、取り挙げた作品は、原則としてタイトル、あるいは本文中に金陵関係の地名が含まれているものに限っている。金陵で書かれたもの、あるいは金陵を舞台とするものでも、地名が含まれていないものは特別の場合を除いて外してある。

## 〈隋代〉

### 五八九年（隋文帝開皇九年）

- ・正月、陳を滅ぼし、蔣州を石頭城に置く。

### 五九〇年（開皇十年）

- ・江寧県治を冶城に移す。

### 六〇六年（煬帝大業二年）

- ・正月、建康・秣陵・同夏・臨沂・丹陽・湖熟の六県をすべて江寧に編入。

## 六〇七年（大業三年）

- ・四月、全国の州を郡に改める。蔣州は南朝時の丹陽郡に復す。

## 〈唐代〉

### 六一八年（隋大業十四年・唐高祖武徳元年）

- ・春、呉興太守の沈法興が煬帝暗殺の報を知り、首謀者たる宇文化及の討伐を口実に挙兵。丹陽郡を始めとする江南十余郡を制圧。自ら江南道大総管となる。以後、沈法興・李子通・杜伏威の三者が中心となりこの地域の覇権を争うが、最終的に杜伏威の配下であった輔公祐が杜伏威の不在に乗じて軍権を掌握し、唐王朝に対して反旗を翻す。

### 六二〇年（武徳三年）

- ・前年、唐王朝は全国的に隋の郡制を廃し州制に復す。この年、江寧県は揚州治所となり、歸化県と改称（～六二五年）。

### 六二三年（武徳六年）

- ・八月、輔公祐、丹楊（丹陽郡江寧県）において帝を称し、国号を宋とし、陳の故宮を修して居す。

### 六二四年（武徳七年）

- ・三月、趙郡王李孝恭により輔公祐の乱鎮圧。唐王朝による江南の平定完成される。なお李百薬〔六〇歳〕は輔公祐の配下となっていたため乱平定後、涇州に配流される（翌年、李世民によって呼び戻された）。

### 六二五年（武徳八年）

- ・蔣州を揚州と名称変更。歸化県は金陵県（金陵山〔鍾山〕にちなむ）と改称（～六二六）、揚州治所として金陵・句容・丹陽・溧水等六県を領す。

### 六二六年（武徳九年）

- ・金陵県治を白下村に移し白下県（～六三五）と改称。句容県とともに潤州（治所は京口〔今の鎮江市〕）に所属変更され、州治の座を失う（以後、唐代を通じて、一時期を除いて州治となることもなく金陵の政治的な地位は著しく低下することになる）。

### 六三三年（太宗貞観七年）

- ・白下県治、白下村より治城に戻す。

### 六三五年（貞観九年）

- ・白下県の名称を江寧県に復す（～七六一）。

### 六三六年（貞観十年）

- ・正月、魏徴〔五七歳〕撰『隋書』成る。その序文等で、六朝文学、特に梁・陳の宮体詩は激しく批判される。以後出されていく『梁書』『陳書』『北齊書』でも同様の評価がなされる。

### 六四二年（貞観十六年）

- ・魏王李泰主编『括地志』上梓される。唐代最初の本格的全国版地理書。

#### 六六五年（高宗麟徳二年）

- ・ほぼこの年の秋、王勃〔一六歳〕呉越に遊び、その間、金陵を訪れ、「白下駅餞唐少府」「秋日登冶城北樓望白下序」を作製（『編年史』。なお張志烈著『初唐四傑年譜』〔巴蜀書社、一九九三年〕は六六七年〔乾封二年〕のこととする）。

#### 六七五年（上元二年）

- ・八月下旬、王勃〔二六歳〕交趾に赴く途次、金陵に立ち寄り「江寧吳少府宅餞宴序」を作製（前掲『初唐四傑年譜』、劉汝霖「王子安年譜」（『王子安集注』〔上海古籍出版社、一九九五年〕付録）。

#### 六八四年（中宗嗣聖元年・睿宗文明元年・武后光宅元年）

- ・九月、徐敬業、揚州において挙兵（駱賓王〔六二歳頃〕、呼応し幕下に加わる）。幕下において、魏思温の北上策と薛仲璋の南下策が対立。徐敬業は薛仲璋の「金陵有王氣、且大江天險。足以為固、不如先取常・潤。」（『資治通鑑』「光宅元年」）の言を採用し、長江を渡り潤州に到るも（その間、金陵を拠点とすることを想定し崔洪に石頭城を修築させる）、結果、十一月に敗北。駱賓王も敗死（『編年史』、前掲『初唐四傑年譜』等）。

#### 七〇六年（中宗神龍二年）

- ・石頭倉を冶城に移す。

#### 七一三年（玄宗先天二年・開元元年）

- ・このころ黄元之「潤州江寧県瓦棺寺維摩詰画像碑」作製（『編年史』）。

#### 七一六年（開元四年）

- ・二月、江寧県、「望県」に昇格。

#### 七二四年（開元十二年）

- ・秋、孫逖〔一九歳〕、登第後、山陰尉を授けられ、赴任の途次、潤州に立ち寄る（『編年史』）。金陵に立ち寄った形跡はないが、このころ南朝・金陵の歴史を詠じた「丹陽行」を作製か。

#### 七二五年（開元十三年）

- ・夏、李白〔二五歳〕、出蜀後、洞庭湖を訪れた後、初めて金陵に遊ぶ（『編年史』、郁賢皓著『新訳李白詩全集』〔三民書局、二〇一一年〕）。

#### 七二六年（開元十四年）

- ・春、李白〔二六歳〕、金陵より揚州に赴く。出発の際、「金陵白下亭留別」「金陵酒肆留別」を作製。また征虜亭より旅立ち、「夜下征虜亭」を作製（『編年史』、前掲『新訳李白詩全集』）。『新訳李白詩全集』によれば「楊叛児」「長干行」「金陵城西樓月下吟」「登瓦官閣」「金陵望漢江」「月夜金陵懷古」「秋夜板橋浦泛月独酌懷謝朓」「金陵新亭」「示金陵子」「出妓金陵子呈盧六四首」は、いずれも、この初回金陵滞在期間の作。

#### 七二七年（開元十五年）

- ・三月、張九齡〔五〇歳〕、洪州刺史を授けられ、赴任の途次、金陵を訪れ、「經江寧覽旧跡至玄武湖」を作製（『編年史』、顧建國著『張九齡年譜』〔中国社会科学出版社、二〇〇五年〕等）。

- ・崔顥〔三四歳頃〕、この年以後、数年にわたり呉越荆鄂に遊び、その間、金陵を題材とする「江畔老人愁」を作製（譚優学著『唐詩人行年考』〔四川人民出版社、一九八一年〕「崔顥年表」）。

#### 七二九年（開元十七年）

- ・綦母潜〔三八歳頃〕、越に赴く途次、棲（栖）霞寺を訪れ、「題栖霞寺」を作製（『編年史』）。

#### 七三一年（開元十九年）

- ・この年より、杜甫〔二〇歳〕、呉越を歴遊し、その間、金陵に立ち寄り、瓦棺寺の維摩図壁画を見て感激する（陳貽焮著『杜甫評伝・上巻』〔上海古籍出版社、一九八二年〕「第三章・壯遊」等）。

#### 七三三年（開元二十一年）

- ・この年の春より翌年にかけて、儲光儀〔二八歳頃〕、故郷の潤州に帰り滞在（『編年史』）。京口臨江亭にて作製した金陵懷古風の連作「臨江亭五詠」はこの頃の作か。

#### 七三七年（開元二十五年）

- ・この年の前後（『編年史』。ただし傅璇琮主編『唐人選唐詩新編』〔陝西人民教育出版社、一九九六年〕所収・陳尚君校輯『丹陽集』は開元二十三年以降、天寶元年より前とする）、曲阿の殷璠〔生没年未詳〕、丹陽郡〔潤州〕管轄下出身の詩人一八人（延陵二人・曲阿九人・句容三人・江寧二人〔孫処玄・余延寿〕・丹徒二人）の作を集め『丹陽集』を編纂。

#### 七四〇年（開元二十八年）

- ・冬、王昌齡〔五一歳頃〕、江寧丞となり、長安より赴任（七五〇年〔天寶九載〕まで在任）。岑参〔二六歳〕およびその兄岑況、見送る。王昌齡「留別岑参兄弟」、岑参「送王大昌齡赴江寧」作製（『編年史』、劉開揚箋注『岑参詩集編年箋注』〔巴蜀書社、一九九五年〕、陳鉄民・侯忠義校注『岑参集校注』〔上海古籍出版社、二〇〇四年〕等。ただし胡問濤・羅琴校注『王昌齡集編年校注』〔巴蜀書社、二〇〇〇年〕は王昌齡の当該作品は彼が七四五年〔天寶四載〕に一時長安に赴き、冬に再び江寧に戻る際の作とする）。

#### 七四一年（開元二十九年）

- ・王昌齡〔五二歳頃〕、江寧に赴く途次、洛陽の白馬寺に立ち寄り、李頎〔五二歳頃〕・綦母潜〔五〇歳頃〕らと交遊。王昌齡「東京府県諸公与綦母潜李頎相送至白馬寺宿」、李頎「送王昌齡」作製（『編年史』、前掲『王昌齡集編年校注』、劉宝和著『李頎詩評注』〔山西教育出版社、一九九〇年〕）。

#### 七四二年（天寶元年）

- ・州制から郡制に改まり潤州は丹陽郡となる。
- ・六月、許登（江寧の人。岑参・王昌齡・杜甫・賈至・劉長卿等と交流があり、「許子」「許八」「許拾遺」等と称されている〔陶敏著『全唐詩人名彙考』〔遼海出版社、二〇〇六年〕等〕、登第し、江寧（金陵）に拝親することになり、岑参〔二八歳〕「送許子擢第帰江寧拝親因寄王大昌齡」を作製し、許登を見送ると同時に江寧滞在中の王昌齡を気遣う（『編年史』、前掲

『岑参集校注』）。

#### 七四三年（天宝二年）

- ・この年の前後、祖詠〔年齢未詳〕、南方に謫せられ、まもなく死去（『編年史』）。「晚泊金陵水亭」はその途次の作か。

#### 七四四年（天宝三載）

- ・この年の前後、皎然〔二五歳〕、長干寺にて出家する（『編年史』、賈晋華『皎然年譜』〔厦門大学出版社、一九九二年〕）。

#### 七四七年（天宝六載）

- ・李白〔四七歳〕、崔成甫〔三五歳〕と金陵を遊覧し、「翫月金陵城西孫楚酒樓達曙歌吹日晚乘醉著紫綺裘烏紗巾与酒客数人棹歌秦淮往石頭訪崔四侍御」「酬崔侍御」等を作製。崔成甫も「贈李十二白」を作製（『編年史』、前掲『新訳李白詩全集』）。また『新訳李白詩全集』によれば、この年、梅岡（現在の雨花台）高座寺の僧中孚と交流し、「登梅岡望金陵贈族侄高座寺僧中孚」「答族侄僧中孚贈玉泉仙人掌茶」を作製。また、「金陵鳳凰台置酒」「登金陵鳳凰台」「登金陵冶城西北謝安墩」「挂席江上待月有懷」「金陵白楊十字巷」「金陵江上遇蓬池隱者」「題金陵王處士水亭」はいずれもこの年の作。秋、金陵より長江を遡り、途中、白壁山を通り「自金陵泝流過白壁山玩月達天門寄句容王主簿」を作製。

#### 七四九年（天宝八載）

- ・春、李白〔四九歳〕金陵に滞在し「勞勞亭歌」「金陵送張十一再遊東吳」を製作。また、東魯の家族を気遣い「寄東魯二稚子」を製作（『編年史』、前掲『新訳李白詩全集』）。

#### 七五〇年（天宝九載）

- ・秋、王昌齡〔六一歳頃〕、龍標の尉に左遷されることになり、江寧を離れ、長江を西行する（『編年史』。ただし前掲『王昌齡集編年校注』は前年のこととする）。
- ・この年、錢起〔三一歳頃〕、進士科に登第するが（『編年史』、蔣寅著『大曆詩人研究・上編』〔中華書局、一九九五年〕「第二章第二節・大曆詩人之冠——錢起」）、それ以前の事跡は、幾度も下第したこと以外、ほとんど不明。ただ、登第後はほとんど長安及びその近辺に住し、江南地方には赴いていないので、「早下江寧」はこの年以前のものと考えられる。また錢起には「送沈少府還江寧」という作もある（ちなみに錢起は呉興〔湖州〕出身）。

#### 七五四年（天宝十三載）

- ・初春、李白〔五四歳〕、江寧県令の楊利物の招きにより、宣城より金陵に赴き、途中、新林浦において風に阻まれ、「新林浦阻風寄友人（『文苑英華』は「金陵阻風雪書懷寄楊江寧」に作る）」作製。また金陵にて楊利物と北湖（玄武湖）に遊び「春日陪楊江寧及諸官宴北湖感古作」を作製。五月、揚州に赴き、魏万〔生没年未詳〕と出会い、ともに金陵に赴く。魏万「金陵酬李翰林謫仙子」作製。後、魏万、王屋山に帰還することになり、その際、李白「送王屋山人魏万還王屋」を作製。まもなく李白も金陵を離れ（『編年史』は秋とし前掲『新訳李白詩全集』は夏とする）、その際「宿白鷺洲寄楊江寧」を作製。『新訳李白詩全集』によれ

ば「江寧楊利物画讚」もこの年の作。

#### 七五五年（天宝十四載）

- ・劉長卿〔三〇歳頃（劉長卿の生年には異説多数あり。とりあえず『編年史』、儲仲君撰『劉長卿詩編年箋注』〔中華書局、一九九六年〕に従う）、金陵に遊び、「金陵西泊舟臨江樓」「棲霞寺東峰尋南齊明徵君故居」を製作（『編年史』、『劉長卿詩編年箋注』）。

#### 七五六年（肅宗至徳元載）

- ・許嵩〔生没年未詳〕、『建康実録』二〇巻を撰する（張忱石点校『建康実録』〔中華書局、一九八六年〕「前言」）。
- ・十二月頃、盧綸〔一四歳頃〕、安史の乱を逃れて江南に至り、その間、金陵に立ち寄り「夜泊金陵」を作製（焦文彬・張登第・魯安澍『大曆十才子詩選』〔陝西人民出版社、一九八八年〕。ただし劉初棠校注『盧綸詩集校注』〔上海古籍出版社、一九八九年〕は七六三年（広徳元年）から翌年にかけての吐蕃の京洛侵入時の作とする）。
- ・この年、呉筠〔生年未詳〕、安史の乱を避けて、嵩山より江南地方に至り、金陵にて「建業懷古」を作製（『編年史』）。
- ・この頃、司空曙〔一六歳頃〕、兵乱を避け、南方に至る（『編年史』）。「金陵懷古」の作製年代は確定し難いが、司空曙の経歴から考えて、この時期の可能性が高いので、とりあえずここに挙げておく。

#### 七五七年（至徳二載）

- ・李白〔五七歳〕、前年の十二月、永王李璘の水軍に招聘され、ともに長江を東下し（目的地は金陵、あるいはさらに下って丹陽〔京口〕・広陵〔揚州〕）、本年初春にかけて「永王東巡歌十一首」を製作。途中、金陵に立ち寄り「龍蟠虎踞帝王州、帝子金陵訪古丘。春風試暖昭陽殿、明月還過鳩鵲樓。」（「其四」）とうたう。永王軍壊滅〔二月〕後、潯陽の獄に繋がるが、秋、崔渙・宋若思の助力により出獄。そのまま宋若思の幕に入り、「為宋中丞請都金陵表」を作製し、金陵を都にするよう上奏する（『編年史』、前掲『新訳李白詩全集』）。
- ・永王の乱平定〔二月〕後、丹陽郡を分割し江寧郡（江寧県〔郡治〕・句容県・当塗県・溧水県を領す）を設置し、ここに浙江西道節度使を置く。

#### 七五八年（至徳三載・乾元元年）

- ・正月、許登、長安より江寧に帰郷することとなり、岑参〔四四歳〕「送許拾遺恩歸江寧拜親」、杜甫〔四七歳〕「送許八拾遺歸江寧觀省甫昔時嘗客遊此県於許生処乞瓦棺寺維摩図様志諸篇末」「因許八奉寄江寧旻上人」を作製し送別する（『編年史』、前掲『岑参詩集編年箋注』『岑参集校注』）。
- ・秋、許登、江寧（当時、郡治所在地）より京に赴くこととなり、劉長卿〔三三歳頃〕「送許拾遺還京」を作製（製作地点として楊世明校注『劉長卿集編年校注』〔人民文学出版社、一九九九年〕は昇州とし、『編年史』、前掲『劉長卿詩編年箋注』は潤州〔京口〕とする）。
- ・十二月、郡制から州制に復され、江寧郡は昇州となる。韋黄裳、刺史を拝命。

### 七五九年（乾元二年）

- ・六月、顔真卿〔五一歳〕昇州刺史・浙西節度使を拜命し、金陵に滞在（翌年正月に刑部侍郎として帰京するまで）（『編年史』）。その間、岳父・韋迪の弟で李白の友人の韋冰が来訪。当時、鄂州に滞在していた李白〔五九歳〕、その情報を知り、「寄韋南陵冰余江上乘興訪之遇尋顔尚書笑有此贈」を作製し、「堂上三千珠履客、甕中百斛金陵春」とうたう（前掲『新訳李白詩全集』）。顔真卿、金陵滞在中、「天下放生池碑銘」を作製（現在南京市にある烏龍潭は顔真卿の造成した放生池であるという伝承がある）。

### 七六〇年（上元元年）

- ・正月、侯令儀、顔真卿を引き継ぎ昇州刺史・浙西節度使となる。
- ・十一月、江淮都統・劉展、反乱を起こす。侯令儀、昇州を棄て逃走し、配下の姜昌群、劉展に降る。劉展、昇州に入り、姜昌群を昇州刺史とする。旬日の間に宣州・和州等、十州を陥落させる。

### 七六一年（上元二年）

- ・正月、平盧節度使・田神功、勅を奉じて劉展を討伐。昇州は回復されるが、平盧の軍により十日間にわたり掠奪を受ける。
- ・江寧県、上元県と改称される（以後、唐王朝滅亡までこの県名）。
- ・七月頃、李白〔六一歳〕、宣州より金陵に遊び、殷淑と交遊し（「三山望金陵寄殷淑」「送殷淑三首」）、また昇州刺史の王忠臣に詩を贈る（「贈昇州王使君忠臣」。この詩には劉展の乱に触れていると考えられる表現がある）。八月、李光弼が臨淮（泗州）に出鎮することを聞き、赴いて従軍しようとするが、道半ばで病気となって再び金陵に戻る（「聞李太尉大举秦兵百万出征东南懦夫请缨冀申一割之用半道病還留別金陵崔侍御十九韻」）。また、この年、監察御史の韓雲朝の笛を聴き「金陵聴韓侍御吹笛」を作製。冬、金陵を離れ当塗に到る（『編年史』、前掲『新訳李白詩全集』）。

### 七六二年（宝应元年）

- ・この年、江東で疫病が大流行し、人民の死者は過半数を超えたとされる。
- ・昇州廃止される。上元県・句容県は潤州に隸属、当塗県・溧水県及び溧陽県は宣州に隸属。

### 七六九年（代宗大曆四年）

- ・七月、冷朝陽〔金陵の人、生没年未詳〕、長安にて進士科登第後、授官を待たず帰省することになり、その際、大勢の人が送別の会に集まり詩を作り、盛況であったという（『唐才子伝』）。李嘉祐〔生没年未詳〕「送冷朝陽及第東帰江寧」、錢起〔五二歳頃〕「送冷朝陽擢第後帰金陵觀省」、韓翃〔生没年未詳〕「送冷朝陽還上元」を作製（『編年史』、前掲『大曆十才子詩選』、王定璋校注『錢起詩集校注』〔浙江古籍出版社、一九九二年〕）。

### 七七三年（大曆八年）

- ・この年あるいはその前後、劉長卿〔四八歳頃〕、鄂州武昌県にて「孫權故城下懷古兼送友人帰建業」を作製し、武昌・建業二つの孫呉の都を偲ぶ。

### 七八〇年（徳宗建中元年）

- ・この年、あるいは翌年頃、**権徳輿**〔二二、三歳）、棲霞寺を訪れ、「与沈十九拾遺同遊棲霞寺上方於亮上人院会宿二首」「棲霞寺雲居室」を作製（蔣寅著『大曆詩人研究・下編』〔中華書局、一九九五年〕「第九章・権徳輿作品繫年」）。

### 七八三年（建中四年）

- ・潤州刺史・鎮海軍節度（治所は潤州京口）の**韓滉**〔六一歳）、李希烈の乱、朱泚の乱などの兵乱が続く京都一帯に憂慮して、江東地区防衛のため、京口より玉山（信州）にかけて石頭五城を建築し、さらに上元県の道・仏の祠四十区を毀ち、建業より京峴（京口）にかけて塙壁を修築する。また、徳宗が永嘉の乱時と同様、金陵に行幸(逃避)する可能性も想定して、仏殿の材を利用して石頭城に館第数十を繕置し、さらに「井を穿つこと皆、百尺」とした。
- ・十月、**包佶**〔生没年未詳、潤州延陵の人）、塩鉄使として揚州にあり、上納すべき八百万貫銭を淮南節度使の陳少遊に奪われ、上元県（金陵）に逃れるが、韓滉に拘留される。「再過金陵」はこの頃の作か。

### 七八九年（貞元五年）

- ・この年の前後、**皎然**〔七〇歳）、しばらく金陵の勞山（勞勞山。勞勞亭のある山）に住み、「勞山憶棲霞寺道素上人久期不至」「勞勞山居寄呈吳処士」を作製（前掲『皎然年譜』）。

### 八〇七年（憲宗元和二年）

- ・九月、鎮海軍節度使・李錡、潤州にて反乱を起こし、金陵の石頭城を修築し、ここに軍を敷くが、十月、潤州大将・張子良に敗北し、捕縛され、十一月、長安にて処刑される。**李紳**〔三六歳〕は李錡の幕にあったが、反乱に反対して下獄。この事実によって李錡処刑後、釈放される（『編年史』等）。
- ・この年の前後、**李賀**〔一八歳）、江南地方に遊ぶ（『編年史』）。李賀の金陵関係の作品としては、梁の武帝が造った庭園での宮女たちの華麗な生活を描いた「追賦画江潭苑四首」が著名である。製作年代は不明だが、この江南地方の旅の経験が生かされていると考え、とりあえずここに挙げておく。

### 八一三年（元和八年）

- ・二月、**李吉甫**撰『元和郡県図志』四〇巻、献上される。
- ・**李公佐**〔生没年未詳〕「謝小娥伝」（作製は八一八年〔元和十三年〕）によれば、江西従事であった李公佐は、この年、金陵の瓦官寺閣に登り、妙果寺の尼となっていた謝小娥の仇である二人の人物の姓名を夢解きによって明らかにする。

### 八一四年（元和九年）

- ・この年かその翌年、**白居易**〔四三歳）、「説張籍古楽府」を作製し、**張籍**〔四九、五〇歳頃）の楽府を「張君何為者、業文三十春。尤工楽府詩、挙代少其倫。」と絶賛する（『編年史』等）。張籍の楽府の多くは製作年代不明だが、「春江曲」「賈客楽」「江南行」等、一連の金陵を舞台とする楽府が存在するので、とりあえずここに挙げておく。ちなみに張籍は金陵の対岸、



和州の生まれである。

#### 八二四年(穆宗長慶四年)

- ・八月、劉禹錫〔五三歳〕、和州刺史として現地に着任。この年、「西塞山懷古」作製。また二年あまりの在任中、「金陵五題」(「石頭城」「烏衣巷」「台城」「生公講堂」「江令宅」)作製。序に「余少為江南客、而未遊秣陵、嘗有遺恨。後為歷陽守、跂而望之。適有客以金陵五題相示、道爾生思、欵然有得。他日友人白樂天掉頭苦吟、歎賞良久、且曰『石頭詩云、潮打空城寂寞回。吾知後之詩人、不復措辭矣。』余四詠雖不及此、亦不孤樂天之言耳。」とある(『編年史』、卞孝萱著『劉禹錫年譜』〔中華書局、一九六三年〕、高志忠校注『劉禹錫詩編年校注』〔黒龍江人民出版社、二〇〇五年〕等)。

#### 八二六年(敬宗宝曆二年)

- ・秋から冬にかけて、劉禹錫〔五五歳〕、和州刺史を罷め、金陵に遊び、「罷和州遊建康」「經檀道濟故壘」「金陵懷古」「台城懷古」を作製(前掲『劉禹錫年譜』。ただし前掲『劉禹錫詩編年校注』は「金陵懷古」を和州刺史在任中の作とする)。

#### 八二七年(宝曆三年・文宗大和元年)

- ・李商隱〔一六歳〕、この頃(あるいは敬宗在位中)、「陳後宮」(「玄武…」)、「陳後宮」(「茂苑…」)を作製し、陳後主を借りて敬宗の奢侈を諷する(劉学鍇・余恕誠著『李商隱詩歌集解』〔中華書局、一九八八年〕)。

#### 八二八年(大和二年)

- ・白居易〔五七歳〕、「見殷堯藩侍御憶江南詩三十首詩中多敘蘇杭勝事余嘗典二郡因繼和之」を作製し(朱金城箋校『白居易集箋校』〔上海古籍出版社、一九八八年〕)、殷堯藩〔四九歳〕の「江南詩三十首」(すでに散佚)を賞賛する。製作年代は明らかにし難いが、殷堯藩の現存作品には江南地方を題材にした作品が多く、特に金陵については「早朝」「金陵懷古」「登鳳凰台二首」「金陵上李公垂侍郎」「生公講台」等の作品が残っているので、とりあえずここに挙げておく。

#### 八三七年(開成二年)

- ・九月、李群玉〔二五歳頃〕、金陵に遊び、「石頭城」「秣陵懷古」を作製(『編年史』)。

#### 八四三年(武宗会昌三年)

- ・二月、盧肇〔生没年未詳〕、進士科に状元として登第(『編年史』)。「競渡詩」の『全唐詩』注に「一作『及第後江寧觀競渡寄袁州刺史成応元』」とあり、登第後、ほどなく金陵を訪れたことがわかる。

#### 八四六年(会昌六年)

- ・九月、杜牧〔四四歳〕、池州刺史より睦州刺史に移る途次、金陵に立ち寄り「泊秦淮」を作製(『編年詩』、呉在慶撰『杜牧集繫年校注』〔中華書局、二〇〇八年〕)。

#### 八四七年（宣宗大中元年）

- ・この年、楊乗〔生没年未詳〕、進士の第に登る（『編年史』）。楊乗の経歴についてはほとんど不明であり、また『全唐詩』にもわずかに五首ほどしか掲載されていないが、「建鄴懷古」という作品を残しているので、とりあえずここに挙げておく。

#### 八四八年（大中二年）

- ・九月、杜牧〔四六歳〕、睦州より京に赴く途次、金陵に立ち寄り、「江南懷古」を作製（『編年詩』、繆鉞著『杜牧年譜』〔人民文学出版社、一九八〇年〕、前掲『杜牧集繫年校注』）。なお杜牧には金陵関係の作品が他に「江南春絶句」「台城曲二首」「金陵」（ただし権徳輿の作ともいう）等があるが、製作年代は特定し難い。

#### 八五四年（大中八年）。

- ・この年、張祜〔六三歳〕、丹陽（潤州・京口）の隱舎で没する（『編年史』。ただし尹占華校注『張祜詩集校注』〔巴蜀書社、二〇〇七年〕は前年のこととする）。張祜は「金山寺」等、潤州に関する諸作が有名であるが、金陵関係の作品も「旅次石頭岸」「石頭城寺」「過石頭城」「送法鏡上人帰上元」「上元懷古」等、比較的多く残している。製作年代が不明であるので、とりあえずここに挙げておく。
- ・この年の冬頃、許渾〔六〇歳頃〕、丹陽（潤州・京口）の丁卯橋畔の自宅で没する（『編年詩』。ただし、羅時進箋証『丁卯集箋証』〔中華書局、二〇一二年〕は生年を七八八年〔貞元四年〕、没年を八六〇年〔咸通元年〕からやや後とする）。許渾の金陵関係の作品は、彼の代表作である「金陵懷古」を初めとして、「遊江令旧宅」「送上元王明府赴任」「維舟秦淮過温州李給事宅」「金陵阻風登延祚閣」「陳宮怨二首」などがあるが、いずれも製作年代が不明であるので、とりあえずここに挙げておく。

#### 八五七年（大中十一年）

- ・この年の秋頃、李商隱〔四六歳〕、塩鉄推官に任ぜられ、江東地区を遊覧し、南朝の故地を巡る。金陵を舞台とする作品としては「南朝」（「地陰悠悠…」）「南朝」（「玄武湖中…」）「齊宮詞」「覽古」「景陽井」「詠史」（「北湖…」）等がある（『編年史』、前掲『李商隱詩歌集解』）。李商隱の金陵関係の詩に、他に「景陽宮井双桐」があるが、『李商隱詩歌集解』は「不編年詩」に入れている。

#### 八六三年（懿宗咸通四年）

- ・秋、皮日休〔三〇歳〕、金陵及び棲霞山を訪れ、「白門表」「遊棲霞寺」を作製（李福標著『皮陸年譜』〔中山大学出版社、二〇一一年〕）。

#### 八六五年（咸通六年）

- ・この頃、劉滄〔六六歳頃〕没する（『編年史』）。懷古詩風の作品を多く残している詩人であるが、金陵を訪れ「經過建業」という懷古的な作品を残している。製作年代は不詳だが、とりあえずここに挙げておく。

### 八六六年 (咸通七年)

- ・二月、汪遵〔四一歳頃〕、進士科に登第する(『編年史』)。汪遵の生涯についてはほとんど不明であるが、その一連の詠史詩は有名。金陵、南朝を主題とする作品も「梁寺」「破陳」「陳宮」等が現存する。製作年代は不詳だが、とりあえずここに挙げておく。
- ・冬、温庭筠〔六六歳〕、長安にて没する(『編年史』、劉学鍇撰『温庭筠前集校注』〔中華書局、二〇〇七年〕)。温庭筠の金陵に関する詩は、彼の詩集の巻頭を飾る「雞鳴埭曲」を初めとして「照影曲」「雉場歌」「雍台歌」「蔣侯神歌」「晚帰曲」「謝公墅歌」「台城暁朝曲」「江南曲」「春江花月夜詞」「西州詞」「齊宮」「春日」「陳宮詞」(以上、楽府体詩。多くは南朝艶詩の雰囲気を濃厚に継承している)、あるいは「題豊安里王相林亭二首」「過吳景帝陵」「楊柳八首、其七」など多数存在する。いずれも製作年代を確定し難いので、とりあえずここに挙げておく。

### 八七二年 (咸通十三年)

- ・韓偓〔三一歳〕、蘇州にて「吳郡懷古」を作製(陳継龍註『韓偓詩註』〔学林出版社、二〇〇一年〕)。吳郡(蘇州)での作ではあるが、「人亡建業空城在」とあり、内容も吳の孫皓と晋の王濬との興亡が描かれているのでここに挙げておく。
- ・この頃、羅鄴〔四八歳頃〕、羅隱・羅虬とともに「三羅」と称される(『編年史』)。金陵関係の作としては「春望梁石頭城」「秋日留題蔣亭」「陳宮」等がある。吳県(蘇州)出身という説が有力であり、だとすれば近隣の金陵に行く機会も多かったものと思われる。いずれも製作年代を確定し難いので、とりあえずここに挙げておく。

### 八七三年 (咸通一四年)

- ・この頃、高蟾〔生没年未詳〕、進士科に及第。製作年代は不明だが「金陵晚望」という作品があり金陵を訪れた経験がある。とりあえずここに挙げておく。

### 八七九年 (僖宗乾符六年)

- ・この年、許棠〔五八歳〕、江寧の丞として金陵に着任する。張喬〔生没年未詳〕も金陵に遊び、許棠の庁舎が王昌齡ゆかりのそれであるとして「題上元許棠所任王昌齡庁」を作製。またこの金陵滞在中に「台城」を作製。また、楊夔〔生没年未詳〕も金陵を訪れ、張喬に出逢い、「金陵逢張喬」を作製(『編年史』)。
- ・この頃、胡曾〔生没年未詳〕、偃唐県令となる(『編年史』)。その後については不明。胡曾については「詠史詩」百五十首が著名であるが、そのうち金陵に関わる作品としては「陳宮」「東晋」「金陵」がある。いずれも製作年代を確定し難いので、とりあえずここに挙げておく。

### 八八〇年 (広明元年)

- ・貫休〔四九歳〕、婺州に滞在。この頃までに多くの楽府体詩を作製(『編年史』)。金陵を主題としたものに「陳宮詞」等がある。

### 八八一年 (広明二年・中和元年)

- ・この年、司空図〔四五歳〕、黄巢の乱を避け河中に逃れて、「南北史感遇十首」を作製(『編

年史』、祖保泉・陶礼天箋校『司空表聖詩文集箋校』〔安徽大学出版社、二〇〇二年〕。

- ・おそらくこの年、陸龜蒙〔五二歳〕没する（『編年史』、前掲『皮陸年譜』）。陸龜蒙の金陵関係の作品としては「金陵道」「景陽宮井」等があるが、いずれも製作年代は不明であるので、とりあえずここに挙げておく。
- ・この年、崔塗〔三二歳頃〕、江東より僖宗行在所の成都に科挙の受験に赴く（『編年史』）。「金陵晚眺（一作「懐古」）」はそれ以前の作か。江南出身であるので比較的早期の作品である可能性が高い。崔塗には他に「東晋」「読庾信集」等の金陵に関する詩がある。

#### 八八二年（中和二年）

- ・この年、杜荀鶴〔三七歳〕、池州の山居を出て、揚州に赴き、友人の張喬・顧雲らと会う。この機会に江南・揚州に関する詩を多く残す（『編年史』）。従って「晚泊金陵水亭」「題瓦棺寺真上人院矮檜」もこの時の作である可能性が高いが、杜荀鶴は池州生まれで、活動範囲も主に池州・宣州であり、いずれも金陵に近く、この年以外にも金陵を訪れる機会は多くあったはずであるので、確定はできない。
- ・この年までに、処默〔生没年未詳〕、羅隱〔五〇歳〕とともに潤州・銭塘に遊ぶ（『編年史』）。「題棲霞寺僧房」はあるいはこの旅遊時の作か。

#### 八八三年（中和三年）

- ・春、羅隱〔五一歳〕、池州を離れ長安に赴く途次、金陵を訪れ、「金陵寄竇尚書」「清溪江令公宅」「春日登上元石頭故城」等を作製（李定広撰『羅隱年譜』〔上海古籍出版社、二〇一二年〕）。
- ・李山甫〔生没年未詳〕、この頃、楽彦禎を頼り魏博の幕に入り従事となる（『編年史』）。李山甫の生涯については、咸通年間に幾度も科挙を受けるがいずれも下第したこと、光啓年間に楽彦禎の幕にいたこと程度しか分かっていない。ただ『唐才子伝』にも指摘されているように、「感時懐古の作」が多く、金陵に関しても「上元懐古二首」を残しており、これが彼の代表作の一つとなっているので、とりあえずここに挙げておく。

#### 八八六年（光啓二年）

- ・秋、羅隱〔五四歳〕、金陵に遊び、「健康」を作製（前掲『羅隱年譜』）。羅隱は金陵を幾度も訪れているため、製作年代が確定し難い作品も多い。ここに一括して挙げておくと、「金陵夜泊」「登瓦棺寺閣」「台城」「途中送人東遊有寄」「過廢江寧県（王昌齡曾尉此県）」「江南」等がある。

#### 八八七年（光啓三年）

- ・昇州を復活させ、州治を上元県の鳳台山の西南一里に置く。
- ・韋莊〔四一歳〕、兵乱を避け江南を放浪中、金陵に流寓し、「謁蔣帝廟」「上元県」「金陵図」「台城」「雜感」「長干塘別徐茂才」「江上題所居」「山墅閒題」等を作製（齊濤箋注『韋莊詩詞箋注』〔山東教育出版社、二〇〇二年〕。ただし『編年史』は夏承濤著『唐宋詞人年譜』〔上海古典文学出版社、一九五五年〕所収「韋端己年譜」に従い、前年のこととする）。

### 八八九年（昭宗龍紀元年）

- ・二月、呉融〔生年未詳〕、進士科に登第（『編年史』）。呉融は山陰（会稽）出身で、若い頃には松江や湖州にも赴いている。また登第後は長江下流域に赴いた形跡はない。従って、呉融の一連の金陵関係作品「金陵遇悟空上人」「金陵懷古」「春婦次金陵」等は登第以前の作と考えられるので、とりあえずここに挙げておく。

### 八九一年（大順二年）

- ・正月、李洞〔生没年未詳〕、進士科を受験し、知貢挙の李贄に「公道此時如不得、昭陵慟哭一生休」の句を献じるも、及第せず（『編年史』）。李洞の事跡については、主な活動範囲が長安と蜀中であつたこと以外、ほとんど不明。「金陵懷古」という作品があるので、とりあえずここに挙げておく。

### 八九二年（景福元年）

- ・この頃、唐彦謙〔生没年未詳〕、壁州刺史となるが、その後の事跡は不明（『編年史』）。唐彦謙の生涯にわたる活動範囲は、太原などの河東地区、隱棲地の襄陽、あるいは蜀中一帯であり、長江下流域に赴いた形跡は現存の伝記資料からは見出せないが、「過清涼寺王導墓下」「過三山寺」「遊清涼寺」「金陵懷古」等の諸作から見て、金陵を訪れた経験があることはほぼ確実であるので、とりあえずここに挙げておく。

### 八九四年（乾寧元年）

- ・二月、徐夔〔生没年未詳〕登第（『編年史』）。製作年代は不明だが、「呉」「陳」等、金陵に関する詠史詩が存するので、とりあえずここに挙げておく。

### 八九五年（乾寧二年）

- ・二月、王貞白〔生没年未詳〕登第（『編年史』）。彼の事跡はほとんど不明であるが、金陵関係の作品として「金陵」「金陵懷古」があるので、とりあえずここに挙げておく。

### 九〇一年（光化四年・天復元年）

- ・二月、曹松〔七十余歳〕、登第（『編年史』）。曹松の金陵関係の作品としては「秋日送方干游上元」「金陵道中寄」「喜友人婦上元別業」「石頭懷古」等があるが、いずれも製作年代を確定し難いので、とりあえずここに挙げておく。
- ・韓偓〔六〇歳〕、翰林学士として昭宗に重用される。「侍宴」を作製し、昭宗と自らを陳後主と江総になぞらえる（前掲『韓偓詩註』）。なお韓偓の金陵関係の作として製作年代不明のものに「金陵」「横塘」がある。とりあえずここに挙げておく。

## 〈五代十国〉

### 九一一年（後梁太祖乾化元年）

- ・【呉】宋齊丘〔二五歳〕、金陵にて李昇（南唐初代皇帝、当時、昇州刺史）に謁し、国士として礼遇され、鳳凰台に陪して「陪游鳳皇台献詩」を作製（『編年史』）。「陪華林園試小妓羯鼓」もこの時の作か。

### 九一七年（末帝貞明三年）

- ・【吳】徐温、金陵（上元県）に城を築き、金陵府と名付ける。

### 九一九年（貞明五年）

- ・【吳】この年、齊己〔五六歳〕、廬山を出て、しばらく江南地方に遊ぶ（『編年史』）。製作年代は定かでないが、齊己が金陵滞在中に作製したものと思われる作品に「夏日西霞寺書懷寄張逸人」「再經蔣山与諸長老夜話」等がある。また、金陵の地名を含む作品は「送徐秀才之吳」「東林作寄金陵知己」「寄西川惠光大師曇域」「懷金陵知旧」「貽惠暹上人」「寄体休」「秋夕言懷寄所知」「懷金陵李推官僧自牧」「看金陵図」等、多数存在する。

### 九三三年（後唐明宗長興四年）

- ・【吳】宋齊丘〔四七歳〕、李昇に対し、吳主を移し金陵を都とするよう勧め、李昇、金陵に宮城を造営する（『編年史』）。

### 九三四年（閔帝応順元年）

- ・【吳】沈彬〔七二歳頃〕、この頃、吏部員外郎となる。彼の金陵を詠じた作品が時に盛んに伝わる。「金陵雜題二首」「再過金陵」が現存している（『編年史』）。

### 九三七年（後晋高祖天福二年）

- ・【南唐】十月、李昇（徐知誥・徐誥）、吳主の禅譲を受け、金陵において皇帝として即位し、国号を唐とし、昇元と改元する。金陵府は江寧府に改称。
- ・【南唐】李建勛〔六五歳頃〕、南唐成立後、同平章事となる（『編年史』）。李建勛は李昇が昇州巡官の頃からの側近。李昇死後、中主李璟にも仕える。また、致仕後は鍾山に隠棲している。金陵関係の作品も多く残しているので、ここに一括して挙げておくと、「賦得冬日青溪草堂四十字」「留題愛敬寺」「金陵所居青溪草堂閑興」「鍾山寺避暑勉二三子」「道林寺」「登昇元閣」「遊棲霞寺」等がある。

### 九四三年（後晋出帝天福八年）

- ・【南唐】陳貺〔生没年未詳〕、隠棲先の廬山より中主李璟に招かれ、「景陽台懷古」を献じる。中主、称賛し、江州土曹掾を授けるが、固辞して廬山に帰る（『編年史』）。「石城懷古」もこの時の作か。

### 九五七年（後周世宗顯徳四年）

- ・【南唐】徐鉉〔四一歳〕、中書舎人となる（『編年史』）。徐鉉は南唐の重鎮として先主・中主・後主三代に仕え（後、北宋にも仕える）、政治的にも極めて重要な人物であるが、詩人としても優れ、特に金陵関係の作品も多く残しており、かつ彼の作品は金陵各地の地名を豊富に詠み込んでいるのを特徴とする。編年可能な作もあるが、煩雑となるので、ここで金陵地名を含む作品を一括して挙げておく。「將過江題白沙館」「從駕東幸呈諸公」「宿蔣帝廟明日遊山南諸寺」「游蔣山題辛夷花寄陳奉礼」「從兄龍武將軍没於辺戍過旧營宅作」「景陽台懷古」「月真歌」「送吳郎中為宣州推官知涇県」「宣威苗將軍貶官後重經故宅」「陪王庶子游後湖涵虚閣」「垂元舎人不替深知猥貽佳作三篇清絶不敢輕酬因為長歌聊以為報未竟復得子喬校書示問

故兼寄陳君庶資一笑耳」「賦石奉送鍾德林少尹員外(并序)」「送從兄赴臨川幕」「和方泰州見寄」「奉和宮傅相公懷旧見寄四十韻」「和鍾大監汎舟同游見示」「和張少監舟中望蔣山」「題梁王旧園」「春尽日游後湖贈劉起居」「後湖訪古各賦一題得西邸」「送陳秘監歸泉州」「又聽霓裳羽衣曲送陳君」「又題白鷺洲江鷗送陳君」。

- ・【南唐】この頃、朱存〔生没年未詳、金陵の人〕、『覽古詩』(二百首、四卷)、一名『金陵古跡詩』あるいは『金陵覽古詩』を作製。現存するものは『全唐詩』卷七五七に「後湖」一首、『全唐詩続補遺』卷一一に「北渠」「秦淮」「東山」「新亭」「天闕山」「石頭城」「烏衣巷」「段石岡」「玄武湖」「阿育王塔」の九首、『全唐詩続拾』卷四四に「烏衣巷」「半陽湖」「潮溝」「直瀆」「運瀆」「鳳凰台」の六首(『編年史』、陳尚君輯校『全唐詩補編』〔中華書局、一九九二年〕)。

#### 九七一年(北宋太祖開宝四年)

- ・【南唐】十月、後主李煜〔三五歳〕、国号「唐」を廃し、「江南国主」と称する。

#### 九七二年(開宝五年)

- ・【南唐】この年より前、徐鉉等撰『吳録』二〇卷成る。

#### 九七五年(開宝八年)

- ・【南唐】十一月、北宋軍により金陵陥落。江寧府は昇州に復する。

#### 〈補足〉

- ・孫玄(元)晏については『全唐詩』に一卷が設けられているが(卷七六七)、これは『宋史』「芸文志」に挙げられている『六朝詠史詩』一卷の作品群と考えられる(現存七五首)。詩題及び本文中に金陵の地名を含む作品を挙げると「武昌」「新亭」「烏衣巷」「八閔齋」「王僧弁」「臨春閣」「結綺閣」「望仙閣」「淮水」「江令宅」等、多数にのぼる。しかしながら孫玄(元)晏については伝記資料がほとんどないため、唐の人か五代の人かも定かではない(趙望秦著『唐代詠史組詩考論』〔三秦出版社、二〇〇三年〕「第七章・孫玄晏『六朝詠史詩』考論」。なお本書では唐代の人の可能性が高いとする)。従って、ここに〈補足〉として挙げておくことにした。
- ・周曇『詠史詩』は堯帝の時代から隋代に到る歴史を詩で詠じた組詩(宋本では一九六首)で、第一五七首から第一九二首にいたるまでが三国から六朝に関する作品となっている。ただ周曇の履歴はほとんど不明で、晩唐の人・五代の人・宋代の人と説が分かれている。『全唐詩』は卷七二八・卷七二九に彼の作品を収めているので唐人と判断していたと考えられる(前掲『唐代詠史組詩考論』「第五章・周曇『詠史詩』考論」、趙望秦著『宋本周曇《詠史詩》研究』。両書とも周曇を唐の人とする)。一点、興味深い現象を補足しておく、周曇の詠史詩は総じて地名を詠み込むことが少なく、六朝部門には金陵関係の地名は全く登場していない。